

トマトフェスタ2008ニュース

第3号

とーくサロン創造農学研究会

事務局 東京都大田区田園調布本町37-13

080 605

山代勤二

トマトフェスタご参加農家、創造農学研究会会員、会友、ご友人のみなさまへ

トマトフェスタ（4年目）は、この夏に東京都大田区において開催すべく準備しております。このニュースは、昨年までに参加した全ての方と、次のトマトフェスタに参加をご検討いただいている皆様へのお知らせです。トマトフェスタニュースは、開催日まで、逐次メール又は郵便でお送りします。

03-3721-8046 (Tel)

03-3721-8082 (Fax)

大評判です 今年もトマトフェスタ

世界のトマト

「見て、触って、食べて、トマトフェスタ2008」

8月2日（土）

学校法人上野塾・東京高等学校（大田区）で

大田区に市民団体「昔ながらのトマトの勉強会」を設立

——トマトで元気な地域づくりと拡がる共同の輪

トマトフェスタ2008の開催地の大田区では市民が「昔ながらのトマトの勉強会」を作りました。トマトフェスタは、従来は創造農学研究会が計画し、単独で開催していましたが、今年からは、地元の皆様が挙げて協力して頂くことになりました。このための組織が、「昔ながらのトマトの勉強会」です。この勉強会は、社会教育団体として大田区の認証を受けています。

同勉強会は、トマトフェスタの実施やこれからの宣伝普及を行います。

各方面に協力を要請——創造農学研究会

大田区長も協力を約束

創造農学研究会を代表して山代勤二は、昔ながらのトマトの勉強会員と共に、5月26日に大田区の松原区長をお訪ねし、トマトフェスタ2008開催の計画を説明、行政の支援をお願いしました。大田区は昨年度のトマトフェスタでは区立せせらぎ公園の施設を無償で開放して頂くなどご協力をいただきましたが、そのことへの改めてのお礼と、大田区で定着

化しつつあるトマトフェスタへの市民ボランティアの協力との社会教育的な意義、そしてもしかして商店街等の活性化効果などの関連等につき、お話をさせていただきました。30分間の会談で、松原区長より、「主旨は理解できた、素晴らしい企画であるので、行政としてできる限りの協力をしたい」との約束をして頂きました。

トマトフェスタ実行委員会からのお知らせ

①各地の生産者の皆さまにお願い

トマトフェスタに大量出品

直売を期待しています

各地では定植も終わり、トマトはぐんぐんと成長しているものと思われます。今年のフェスタは、昨年と違い、持ち込み販売が可能です。当日は500人以上の来場者がありますので、消費者はどんなトマトに出会えるか、今から楽しみにしています。皆様のトマトを大量にお持ち込み下さい。数量は裁けます。

②勉強会ではシーズン中、皆様のトマトを買い受けます

昔ながらのトマトの勉強会では、大田区内の各地で、皆様のトマトの試食会・料理研究会（紹介行事）をトマトフェスタとは別に、6月から10月までの間に断続的に行います。この研究会にはレストラン関係者や業界関係者も招請します。このために、必要なトマトを買わせて頂きたいと思えます。この件は改めて個々にご相談致します。

③ことしも「トマトの宝石箱」生産中

MEG・NET TOMATO CLUB より

昨年度から販売を始めた、伝統トマトの色とりどり品種を取りそろえた「トマトの宝石箱」をことしも生産しております。「トマトの宝石箱」を先駆的に力を入れて生産しているのは、

岩手県遠野市の5軒の生産者ほかによる遠野ファトリアグループです。

4月下旬に仮植が終わり、定植へと進んでいます。農薬を使わずに生産するために、収穫量は少ないのですが、そのまま口にはおぼることができます。

消費者の皆様にとマトフェスタでお目もじできるかどうかは、お天道様次第ですので、結果は当日会場で明らかに……………。

「トマトの宝石箱」に関してのご質問は、直接



トマトの宝石箱パックと
ブラックチェ
リー

MEG・NET TOMATO CLUBまでお寄せ下さい。

TEL&FAX:03-3721-0844

E-MAIL:megnet@sea.plala.or.jp

今こそ農業をエリート産業に

——創造農学研究会、コンソーシアムづくり 各地のリーダーに協同F Sを呼びかけ

創造農学研究会では、全国に散らばる会員、旧会員に呼びかけて、各地に新しい農業の経営を確立するためのコンソーシアム形式での共同F Sを提案しています。この提案は、当面行政や産業界のトップリーダー達に開示し協力を要請します。

新しい農業のイメージは、地域の共同体的な取り組みを基本にして、「土を大切に」「環境を創り」「最高級品質の農産物を作る」事業です。「耕すものが土を掴む」（関東武士の平将門の言葉）のが農業です。個々に競争して経営者同士が優勝劣敗を争うのではなく、耕すもので、上の三つの目標を共有する「地域農場」を作り、多彩なマーケティングを行い、産業投資家およびエリート企業を呼び込む考え方です。

創造農学研究会では、今年は具体的に2-3の地域で具体化に向けての話し合いに入ります。この仕事には、農業、食品工業、情報産業、環境産業などの技術者、研究者も協賛しています。

山代勁二のひとりごと

○食と農に感謝する気持ちを大切に

東京都の南部、大田区、品川区はかつては、人口100万都市の大江戸の台所を支える農村と漁村が広がっておりました。今はすっかり形を変えましたが、両区は決して冷たい高層ビルや倉庫、スーパーやデパートだけの町ではありません。地域には商店街もたくさんあり、小中学校もたくさんあります。人々の力で水や緑や土が大切に育まれ、人と人との繋がり、連帯がまだまだ強く意識されてきております。

トマトフェスタは、そういうヒューマンな息吹を背景に、農業や漁業の大切さを学び農産物に感謝する気持ちと共に、自然と交わることの楽しさ、美しさ、喜びを分かち合うささやかな行事にしたいと思います。

○ 飢餓に向かう？世界、日本は筆頭の飢餓国に！

地球が悲鳴を上げています。一つは温暖化という気候変動です。世紀末までに平均気温が摂氏2度も上昇すると、地球は「ノアの箱船」状態になることが冗談ではなく語られております。もう一つは、穀物や石油が投機材料にされ、また食料がより儲かるバイオ燃料に変換され飢えが急速に広がっていることです。この二つの打撃は賢者によって「取り押さえ」なければ地球人類には未来がありません。

日本は、食料自給をうっかりしてきました。このままでは日本はもうすぐ飢餓国になる可能性があります。農業を捨ててはならない、農村を守らなければならないことを人々が気づきはじめています。トマトフェスタはこういうことも考える行事です。